

大学生の発達障害傾向がインターネット依存傾向に与える影響

—対人劣等感と対人恐怖を媒介した因果モデルの検討—

○菊地創¹・富田拓郎²

(¹中央大学大学院文学研究科・²中央大学文学部)

キーワード：インターネット依存, ADHD, 自閉スペクトラム症

The influence of Developmental disorder on internet addiction in college students in Japan

Sou Kikuchi¹ and Takuro Tomita²

(¹Graduate School of Letters, Chuo University, ²Faculty of Letters, Chuo University)

Key Words: Internet addiction, Attention-deficit/hyperactivity disorder, Autism spectrum disorder

目的

わが国の若年層におけるネット普及率は20～29歳でもっとも多く99.2%である(総務省, 2017)。一方で、ネット利用がもたらす様々な心理・社会的問題も指摘され、とりわけ大きな問題がインターネット依存(ネット依存)である。ところがわが国におけるネット依存についての研究は少なく、さらなる研究の蓄積が求められている。

ネット依存に関連する要因として発達障害傾向の存在が指摘されているが(菊地・北村・富田, in press), その因果関係には不明な点が多い。自己治療仮説によれば嗜癖行動は自身の内外の苦悩を緩和する効果があるとされる(Khantzian & Albanese, 2008)。発達障害傾向を有する者は対人関係において問題が生じることが多く、現実での対人関係を回避しオンライン上でのコミュニケーションを好みつつ、次第にネット依存に陥る可能性がある。以上の知見から本研究では、発達障害傾向が対人関係の問題(対人恐怖や劣等感)を媒介しネット依存傾向に影響を与えるという因果モデルを検討する。

方法

調査時期 2017年9～10月に実施した。

調査参加者 関東圏の私立大学4校での配布に加えて、機縁法によって質問紙を配布し、学部学生409名(男性193名, 女性210名, 不明6名)が調査に参加した。平均年齢は20.36歳(SD=1.27)であった。

使用尺度 (1) 全般的インターネット乱用傾向尺度(GPIU2)(Yong, 2013)(Compulsive Use, Absorptionなど4因子), (2) 大学生の自記式ADHDチェック項目(篠田・沢崎・篠田, 2015), (3) Autism Spectrum Quotient短縮版(Kurita et al. 2005), (4) 劣等感尺度(高坂, 2008)の下位尺度「友達づくりの下手さ」と「異性とのつきあいの苦手さ」, (5) 対人恐怖心性-自己愛傾向2次元モデル尺度短縮版(清水・川邊・海塚, 2006)の下位尺度「対人恐怖」を使用した。

研究倫理審査 第二著者の所属機関の学内倫理委員会による倫理審査の承認を得て実施した。

結果

各下位尺度得点の平均値, 標準偏差および諸変数間の相関を算出した(Table)。発達障害傾向が対人恐怖および対人劣等感に影響し, 対人恐怖と対人劣等感がそれぞれネット依存傾向におよぼす影響について検討するために, 構造方程式モデリングによるパス解析を行った。ADHD傾向とASD傾向の間, Compulsive UseとAbsorptionの間, 友人劣等感と異性劣等感の間, 対人恐怖と両劣等感の間に誤差共分散を設定した。モデルの適合度は, GFI=.97, CFI=.97, RMSEA=.08であり十分な値であった(Figure; 太線は1%水準で, 細線は5%水準で有意なパスを, 点線は有意でなかったパスを表す)。

考察

パス解析の結果, 発達障害傾向が対人恐怖および対人劣等感を高め, さらにネット依存傾向に影響するというモデルが

一部支持された。

異性劣等感からPOSI(Preference for Online Social Interaction)へのパスが有意でなかった背景には, ネットコンテンツが異性との関わりを求めるよりも友人と楽しむためのもの(オンラインゲームなど)という可能性が考えられる。ネットを用いた異性との交流を図るコンテンツとして出会い系サイト等があるが, これはコミュニケーションよりもその先にある性的な側面への関心の方が強いと思われる。アダルトコンテンツのネット利用への依存はオンラインオークション, オンライン株式売買などの特定の目的のためにインターネットを利用するSPIU(Specific Pathological Internet Use)に分類される(Davis, 2001)。このため, 異性劣等感は一一般的なネット使用を測定するGPIUの下位因子POSIへの有意な効果が示されなかった可能性がある。

ADHD傾向が対人劣等感に有意な効果を示さなかったのは現時点では明らかではなく今後の検討課題であるがADHDは多動性や衝動性が高いことから, 人間関係の意味が肯定的であるか否かに関わらず, 他者と多く関わるという可能性があり, ASDほどは対人劣等感と関連しないのかもしれない。

最後に本研究の限界として一般大学生を対象としたアナログ研究であることがあげられる。本研究で示された結果が臨床的なネット依存を有する学生で再現できるか否かについては, 慎重に検討していく必要がある。

Table 記述統計量と相関係数

	1	2	3	4	5	9	10	11	M	SD
1 POSI	—	—	—	—	—	—	—	—	12.24	5.94
2 Compulsive Use	.53**	—	—	—	—	—	—	—	17.51	6.94
3 Mood Regulation	.55**	.58**	—	—	—	—	—	—	9.02	3.80
4 Absorption	.66**	.73**	.59**	—	—	—	—	—	11.94	6.24
5 ADHD	.33**	.30**	.22**	.37**	—	—	—	—	34.60	9.67
6 ASD	.29**	.19**	.23**	.23**	.41**	—	—	—	8.18	3.33
7 異性劣等感	.30**	.22**	.27**	.25**	.20**	.32**	—	—	16.31	7.13
8 友人劣等感	.36**	.24**	.37**	.30**	.25**	.45**	.76**	—	16.09	15.00
9 対人恐怖	.37**	.29**	.32**	.33**	.34**	.47**	.51**	.62**	28.12	28.00

**p<.01, *p<.05, †p<.10

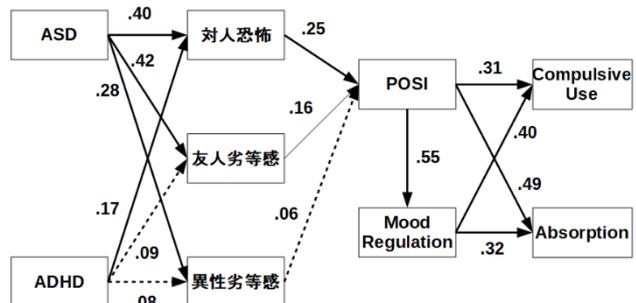


Figure 発達障害傾向がネット依存傾向に与える影響モデル